

全電源喪失の記憶 証言 福島第1原発

14年(平成26年)5月31日(土曜日)

ア版

■ 第3章「制御不能」
東日本大震災の発生時、福島第1原発では1～3号機が運転中だった。外部電源や非常用ディーゼル発電機といった交流電源喪失後、3号機だけは建屋内のバッテリー（直流電源）が機能を維持していた。3月13日未明には高圧注水系（HPC）と呼ばれる装置で原子炉注水を続けていた。HPCは炉から出る蒸気を動力にしてタービンを回し炉内に水を送り込んでいる。13日午前2時ごろ、炉内の圧力が下がり始めた。大幅に下がればHPCは自動停止するはずだが、止まらない。

このままだと装置が破損し、蒸気

■ 第3章「制御不能」

13

SR弁を開けられます



福島第1原発3号機と同型のHPC
機（東京電力提供）

3号機注水途絶える

が漏れ出すかもしれない。中央制御室の当直長や主任高宮一美（39）はそう懸念した。

「HPCを止めてくれ」。午前2時42分、高宮は制御盤前の運転員に手動停止を命じた。

「止まりませんっ」。運転員がスイッチを操作しても停止しなかった。

「バルブを閉めろ」。蒸気が通る配管のバルブを閉めよう命じ、ようやくHPCは止まった。制御盤で操作しても、機器が反応しなくなつてきている。高宮は「バッテリ！が弱ってきてる」と思った。

制御室はHPCに代わり、建屋

内のディーゼル駆動消防ポンプで注水しようと考えた。消防ポンプは水は原子炉隔離時冷却系（RCIC）を送り込む圧力が低いため、まずはやHPCといった装置を使って繰原子炉圧力容器内から圧力抑制室に蒸気を出して減圧しなければならぬ途絶えた途端、原子炉の圧力が上昇に転じた。

HPCを手動停止した際の炉内圧力は0・58メガパスカルだった。1時間後には4・1が燃え、2時間後には約7メガパスカルへと急上昇した。また高温の燃料が炉内の水を蒸発させ続けてい

るのだ。

「開きません！」。運転員が叫んだ。

「何っ」。高宮は8個あるSR弁全てで試してみよう命じたが、返ってきた答えはいずれも「駄目です」

だった。

高宮は再びHPCで原子炉に水を送り込もうとしたが、バッテリ！が枯渇していく起動させることができない。高宮は「バッテリ！が弱ってきてる」と思った。

ついに3号機原子炉への注水が途絶えた。

内に転じた。

高宮は逃げし安全弁（SR弁）を開けるよう命じた。SR弁の操作可能を示す制御盤のランプは点灯していた。

「HPCを止めなさい」。運転員が叫んだ。

高宮は前日の12日午後、作業のため屋外に出た際、爆発直後の1号機を見ていた。鉄骨だけになつた建屋上部、衝撃で窓ガラスが割れた車。「チエルノブイリのようだ」。瞬間的にそう感じたのを思い出してい

た。3号機もまた1号機と同じ道を

走った。肩書は当時。共同通信 国分伸矢